

審査員特別賞

差別の種に気づいて

宮城県仙台二華中学校 3年

阿部 想

私はこの春、シンガポールにあるセカンダリースクールを訪れました。交流の間は、バディと呼ばれる現地の生徒と三日間寝食を共にします。バディが発表される日、私の気分は高揚して、今にもはち切れんばかりの期待で胸がいっぱいでした。「バディはどんな人かな。」、そう考えながらバディの写真を見た次の瞬間、期待で膨らんだ私の心の風船はみるみるうちにしぼんでしまいました。

なぜなら、写真の中で微笑む女の子がスカーフをかぶっていたからです。「イスラム教」という言葉が頭をよぎり、私は激しく動揺しました。

女性は外出時にスカーフで顔を覆うことや豚肉を食べないことなど、私の生活からはあまりにもかけ離れたイスラム教は、私にとって怖いもの、恐ろしいものというイメージが出来上がっていたのです。そんなイスラム教を信じるバディと打ち解けられるか、不安の雲が私の心を覆いました。

しかしそんな心配は、バディと過ごし、時間を重ねていくうちに段々と消えていったのです。バーベキューをする中、マーライオンを背に写真を撮る中、一緒にマレーの伝統料理を食べる中で、私が今まで彼女に対して間違っただけの考えを持っていたことに気が付きました。

彼女はフレンドリーで優しい人柄だということ。K-POPが好きで、ダンスとギターが上手な普通のティーンエイジャーだということ。沢山のことが分かりました。

彼女だけではありません。彼女の家族の注いでくれる愛は私の家族が注いでくれる愛と変わりはありませんでした。豚肉を食べないだけで、スカーフで顔を覆うだけで、私と彼らに何ら変わりはないのです。

私はこの出来事を通して、自分の心の中に潜む差別の種に気づきました。異文化を理解し、「差別はいけない。」と考え、どんな人に対しても偏見を持たず、平等に接しようとしていたつもりでした。しかし、「そのつもり」になっているだけだったのです。

人は誰でも私のように、自分では差別をしていないつもりでも、心の底には偏見や差別の種を持っているのかもしれませんが。その種を取り除くためにできること、それは相手をよく知り、一人の人間として接するということなのだと私は考えます。

この秋、今度は私のバディが日本を訪れます。イスラム教を信じる私のバディに戸惑う人はきっといるでしょう。何となく怖いと感じてしまう人もいるかもしれません。そんな時に、私がシンガポールでバディと過ごして感じたことを話して、人々の差別の種を取り除くこと。それが今の私にできることだと考えています。「バディはしっかり者

でフレンドリーな人だよ！」、そう言って、彼女と皆をつなぐ架け橋になりたいと思います。